

ノスタルジアとは何か——記憶の心理学的研究から

川口 潤

記憶を少しづつでも失っていけば、記憶が我々の人生を形作っていることがよくわかる。記憶のない人生は人生とは呼べない。(中略)。記憶は我々自身を統合するものであり、理性であり、感情であり、そして行為である。記憶がない場合、我々はただの空虚である。

——ルイス・ブニュエル (Luis Buñuel, 「An Unspeakable Betrayal」)

1 はじめに

あなたがもしビートルズの曲、例えばLet it beを聴くと何を感じるだろうか。ひとつは全く知らないという答である。若い人であればそのように答えるかもしれない。一方、少し年代が上の人であればヒットした時代を実際に体験していて、よく知っているかもしれない。特に後者の場合には、Let it beという曲自体の詳細を語るができるだろう。Let it beが何年頃の曲であるかとか、どのくらいヒットしたとか、ポールマッカートニーが作ったとか、さらにビートルズはアップルレコードを作り、それがアーティストがレコード会社を作るきっかけになったとか、様々に思い出すだろう。これらは、その曲に関する知識であり、意味記憶 (semantic memory) と呼ばれる記憶である。一方、その曲を聴いた時の体験を思い出すこともあるだろう。たとえば、その時代は中学生で、日曜の夕方に聞いていたFM番組で紹介されて初めて聞いたとか、毎週のように流れていたとか、その曲を聴いた後に家族で夕飯を食べていたとか、である。これらは出来事の記憶でありエピソード記憶 (episodic memory) と呼ばれるものである。特に自分の体験の記憶は自伝的記憶 (autobiographical memory) と呼ばれている。さらに、思い出した中学生時代は楽しかったとか、卒業式でクラスメイトと別れることが悲しかったとかのように、何らかの感情を伴って思い出されることも多い。このような昔の記憶にまつわる感情はしばしば「なつかしさ」(ノスタルジア: nostalgia) という言葉で表現されることが多い。

ここでは音楽を例にあげたが、音楽に限らず、人は何らかの情報、つまり、音楽や映画、写真、ビデオ、あるいは実際の風景などがきっかけとなって、深く潜んでいた記憶が立ち現れてくる経験をする。それは、遠くにある記憶では

なく、すぐ目の前に再び現れ、かつての光景や感情を再体験するような印象を伴うものである。このようなすっかり忘れていた記憶が、その深みから立ち現れるような現象はなぜ起こるのだろうか。その背景にはどのようなプロセスが関わっているのだろうか。そのような心的行為は人にとってどのような意味を持っているのだろうか。本論文では、心理学における記憶研究の枠組みを手がかりに、特に、過去の出来事の想起に伴うノスタルジア感情を中心に考えてみたい。

2 ノスタルジアとは

ギリシャ神話のトロイ戦争 (Trojan War) の逸話に次のようなものがある。トロイ戦争で名将として活躍したオデュッセウス (Odysseus) は、貞淑な妻、ペネロペ (Penelope) を故郷に残して戦いに遠征したが、長い年月の遠征の中、オギュギア (Ogygia) 島で海の精カリプソ (Calypso) に、この島にとどまれば永遠の命が与えられると告げられる。それに対し、オデュッセウスは、自分の妻ペネロペは海の精カリプソに比べると慎ましやかで美しくもないが、自分はペネロペを日々思い焦がれていて、そのため故郷が恋しいし、その故郷に帰れる日を切望していると答える。この美しい話には、長年故郷を離れて、そこに待っている人がいることによって、切望の感覚 (感情) が生じることが明確に述べられている。このような感覚 (感情) が、ノスタルジアが指し示す内容である (Wildschut, Sedikides, Routledge, 2008; Sedikides, Wildschut, Arndt, & Routledge, 2008)。

ノスタルジアという言葉が明示的に使われるようになったのは、それほど古いことではなく17世紀になってからである。スイスの精神科医、ヨハネス・ホーファー (Johannes Hofer; Hofer, 1688, 1934) が切望の苦しみを表すものとして、nostos (return) と algos (pain) を組み合わせで作った造語である。いわゆる「帰還の切望の苦痛」という意味になろうか。17、18世紀には、スイス人傭兵が故郷を離れて遠征に出ることがあったが、その傭兵の中に、泣き続けていたり、心臓の鼓動が早くなって落ち着かなくなったりするものがいた。このような傭兵の症状を現す「病気」として、ノスタルジアという言葉が使われるようになった。このような出自からもわかるように、ノスタルジアは「病気的一种」であり、いわゆるホームシック (homesickness) とほぼ同義の意味を持っている言葉である。

ノスタルジアはその後、特に不安や悲嘆、不眠などの心理的症状を示す精神病のひとつとしてとらえられるようになった。20世紀半ば頃になると、Freud による精神分析的な考え方が一般的になったことを背景に、ノスタルジアを発達の初期段階へ回帰する願望 (一種の退行) と考えられるようになり、強迫

神経症、またうつ症状の一種と捉えられた。そこでも、ノスタルジアは(病気の一種としての)ホームシックと同義の意味で用いられている(Sedikides, Wildschut, & Baden, 2004)。

ただ、近年では、人々は、ノスタルジアを必ずしも「病気」と捉えているわけではないことが示されている。たとえば、Davis (1979)は、ノスタルジアという言葉の連想として、暖かさ、古風、子ども時代、切望といった言葉があげられることを示しているが、これらの連想語は「病気」という意味を含んでいるわけではない。また、ホームシックは過去のある場所を指すことが多いが、ノスタルジアは場所だけでなく、人や出来事など様々な対象に対してあてはめられる言葉となっている(Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006)。これらのことからわかるように、ノスタルジアが示すものは、当初は「病気」であったが、現在では必ずしも「病気」といったネガティブな意味を含むものではない。

3 個人的ノスタルジアと歴史的ノスタルジア

さて、前節で述べたノスタルジアは、ある個人が故郷を離れたことによって感じる感情を指すものであった。そこには、子どもの頃に過ごした体験の記憶といった個人的体験の記憶、つまり自伝的記憶が深く関わっていると考えられる。一方、個人を超えた社会的側面に着目してノスタルジアという言葉が使われることもある。一般に前者は個人的ノスタルジア(personal nostalgia)と呼ばれるが(e.g. Wildschut et al., 2006)、後者のようなノスタルジアについて、Gabriel (1993)は組織的ノスタルジア(organizational nostalgia)、またStern (1992)は歴史的ノスタルジア(historical nostalgia)と呼んでいる。

本論文では主として前者の個人的ノスタルジアに着目した心理学的研究について述べるが、歴史的ノスタルジアについて少し触れておこう。ある共通の文化基盤を持っている場合、個人的経験をしていない場合でもノスタルジアを感じる場合がある。このような歴史的ノスタルジアの効果は、少なくとも心理学で直接取り上げた研究はあまりみられないが、消費者行動の研究において、マーケティング戦略の文脈で取り上げられている(堀内, 2007)。つまりなつかしさに焦点をあてて、消費者が実際に経験していなくてもノスタルジアを感じる商品による購買行動を検討するものである。たとえば、Brown et al. (2003)は、なぜブランドに魅力があるのかという問題を、ブランドについての記述を分析することによって検討した。そこでは、Allegory (ブランドヒストリー)、Arcadia (理想郷)、Aura (ブランドのエッセンス)、Antimony (パラドックスの内在)という、消費者が魅力を感じる4つの特徴が見いだされた。その中の一つである、理想郷という特徴は、過去を特別な場所と感じるノスタル

ジア感覚と一致するものである。また、Kusumi, Matsuda.& Sugimori (2010) は、ノスタルジア広告を支える心理的側面を検討するために、なつかしき感情の生起に関する自由記述を分析し、なつかしさを引き起こすことがらが、過去の繰り返しの経験と長い空白時間が重要であること、なつかしさが引き起こされたり昔をなつかしむ傾向は男女とも加齢による上昇が見られ、男性の方がやや高いことを見いだしている。この知見は主に個人的ノスタルジアに関する研究であるものの、ノスタルジアが広告研究と密接に関係することを示す研究の一つである。

次に、個人的ノスタルジアを扱った心理学研究を詳細に見てみよう。

4 個人的ノスタルジアに関する心理学研究

では、人はどのようなときに、またどのようなメカニズムでノスタルジアを感じるのでしょうか。また、現代人が実際に感じるノスタルジアとはどのようなものでしょうか。近年の調査研究である Wildschut, et al. (2006) をもとに考えてみよう。

Wildschut et al. (2006) は、まずノスタルジア経験の内容はどのようなものかを、Nostalgia という雑誌に投稿された内容分析によって行っている。その雑誌では、読者から個人的な経験の記述を1000語から1500語程度で投稿してもらうことを求めており、その投稿の中から29名の投稿を分析した。その内容分析の結果、以下の事柄が明らかとなった。まず、第一に、その記述は自分自身が主人公となっており、一人称視点で描かれていることである。三人称的視点はめずらしく、また、登場人物が一人ということも少ない。このことは、ノスタルジアが自己を中心とした社会的(対人的)要素を含んでいることを示している。第2に、ノスタルジアの対象となるものを分類したところ、約30%が人物、約20%が重要な出来事であった。第3に、記述の中での感情の変化、つまりポジティブからネガティブ、あるいはネガティブからポジティブの割合を調べたところ、ポジティブからネガティブへの変化が67%とネガティブからポジティブへの変化の29%を大幅に上回っていた。さらに四つめの分析として、語りにあらわれている気分をノスタルジアの感情表現ととらえて分析したところ、ポジティブな感情がネガティブな感情より多いことが明らかとなった。

これらの分析から、ノスタルジア経験は、全体としてポジティブな気分を含み、自己を中心として他者や人生の重要な出来事と関わる相互作用を含む経験であることがわかる。

このような雑誌に投稿された資料分析に加え、Wildschut et al. (2006) は、実際に172名の人々にもっともノスタルジックと感じられる出来事を想起してその経験を記述することを求めた。その結果、投稿の記述と同様のノスタル

ジア経験の特徴が得られたことに加え、参加者の79%の人々が、1週間に1回程度はノスタルジア経験を感じていることを見いだしている。さらに、ここではノスタルジアを感じたときの状況について詳細に尋ねているが、その結果、ノスタルジアを感じるきっかけとして最も多かったものはネガティブな感情(38%)であった。続いて社会的相互作用(他者との関係など)が24%であった。

このネガティブな感情がノスタルジア喚起のきっかけとなるという点について、さらにWildschut et al. (2006)は実験的な検討を行っている(Study 3)。そこでは、まず気分誘導を行い、その後、ノスタルジアに関する質問紙を実施した。ネガティブな気分誘導は津波に関する記述、ニュートラルな気分誘導は宇宙船が土星に着陸した記事、ポジティブな気分誘導はデトロイト動物園でのホッキョクグマの赤ちゃんの記事をそれぞれ読むことよって行われた。その後の気分チェックで、確かに気分が誘導されていることが確認された。そして、ノスタルジアを感じているかどうかの質問紙(たとえば「今非常にノスタルジックな気分である」)を実施したところ、ネガティブな気分誘導条件において、より強いノスタルジアを感じていることが明らかとなった。

また、ノスタルジア経験の記載の分析では対人的な記述が含まれていたことから、ノスタルジア経験を想起してもらった状態で、社会的絆(ECR-R: Revised Experiences in Close Relationships Scale; Fraley, Waller, & Brennan, 2000)を測定するための質問紙を実施した(Study 6)。この質問紙は、愛着不安(たとえば「私の交際相手は私をあまり気にかけてくれない」)や愛着回避(たとえば「私は交際相手と親密になると非常に落ち着かない」)といった項目からなる。ノスタルジアを感じている参加者は、そうでない参加者に比べて、ECR-Rの評定値が低い、つまり、より社会的つながりを求めていることが明らかとなった。

これらの結果をまとめると、ノスタルジア経験とは、少し悲しい気分の時に、自分を主人公として他者との関わりのある重要な出来事を想起するという状態であるということができよう。そして、その経験をすることによって、悲しいネガティブな気分がよりポジティブな気分へと変化する、すなわち、ノスタルジアは気分をよりポジティブなものに変化させる機能を持っていると考えることができる。さらに、ノスタルジア経験は特殊なものではなく、非常に一般的であり、多くの人が日常しばしば経験することであることも明らかとなった。また、ノスタルジアな気分を感じることによって、他者との社会的つながりをより感じる状態になることが示された。

以上述べた研究は、ノスタルジアを単に抽象的に議論するにとどまらず、客観的測定によって、人が感じるノスタルジア感が何か、またそれがどのような機能を持っているかを研究することが可能となってきたことを示すものである。もう一つ、ノスタルジアが孤独感を低減する機能があることを示した研究を試みよう。

Zhou et al. (2008) は、孤独感尺度 (UCLA Loneliness Scale; Russell, 1996)、ノスタルジア尺度 (SNS: Southampton Nostalgia Scale; Routledge, Arndt, Sedikides, & Wildschut, 2008)、社会的サポート感尺度 (MSPSS : Multidimensional Scale of Perceived Social Support; Zimet, Dahlem, Zimet, & Farley, 1988) を実施し、その関連を調べた。ここでの仮説は、ネガティブな感情である孤独感は他者から支えられているという社会的サポート感を低下させるが、すでに述べたように、ネガティブな感情はノスタルジアを喚起する可能性が高い。さらにノスタルジア経験が社会的つながりを感じさせることが示されていることから、ノスタルジア感が高まると社会的サポート感は一時的に上昇するはずであるというものである。その結果、孤独感というネガティブな感情は直接的には社会的サポート感を低下させるが、ノスタルジアを感じることで、社会的サポート感は一時的に上昇し、結果的に、孤独感が直接もたらす他者からの孤立という感覚が低減するのではないかということである。実験の結果、この仮説は確かめられた。

さらに、ノスタルジアがこのような社会的孤立感を低下させるとすれば、日常場面で逆境から立ち直った人々においてはノスタルジア感が重要な役割を果たしていたことが予想される。そこで彼らは、逆境からの立ち直りやすさを調べるものとしてレジリエンス (resilience) を測定した。レジリエンスとは、心理的ショックや侮辱、混乱などの影響からの回復しやすさを指すものであり (Garmezy, 1991)、その特性の高い人は、テロを受けた経験や配偶者の死亡といったトラウマ体験からの回復が早いことが知られている (Bonanno, 2005)。レジリエンスは、たとえば「逆境にあるとき、そこから逃れる方法をだいたい見つけることができる」といった質問項目で測定された (RS: Resilience Scale; Wagnild & Young, 1993)。その結果、レジリエンス得点が高い人は、孤独感が強い場合にノスタルジアを感じやすいことがわかった。すなわち、逆境から立ち直りやすい傾向のある人は、つらい状況にあるときにノスタルジアを感じることで、他の人から支えられているという社会的サポート感が高まり、その結果、心理的健康を回復しやすいと考えることができる。

この研究からわかるように、ノスタルジアは単に過去への惜別の念ではなく、現在の逆境を乗り越え、将来の健康な心理状態を保つという機能を持つ感情であるということができよう。

5 ノスタルジアを支える記憶システム

これまで、ノスタルジアとはどのようなものか、またノスタルジアを感じるということが、人間にとってどのような意味があるのかを述べてきた。しかし、どのような心理的メカニズムでノスタルジアを感じるのかは明らかにはなっていない。

いない。本論文では個人的ノスタルジアに焦点をあててきたが、その基礎には個人的体験の記憶があることは当然である。そこで、本節では、ノスタルジアを感じる心理的メカニズムとして、記憶システムの最近の研究との関連から考えてみる。

記憶	意識	感情
エピソード記憶	自己内省的意識 (auto-noetic consciousness)	ノスタルジア
意味記憶	可知意識 (noetic consciousness)	
知覚的記憶 (PRS: Perceptual Representation System)	無意識 (anoetic)	無意識的情動システム

【図1】 記憶と意識、感情の階層的関係

記憶と意識の関係は Tulving (1985, 2001) にもとづく。階層的表示は、より下位から上位へと（系統的、個体的）進化を示している。たとえば、子どもは知覚的記憶に基づく対象の認知ができて、いつ何をしたという体験を思い出し語ることはできない。ノスタルジアはその複雑性や社会的機能から、もっとも上位の感情の一つと位置づけることができる。一方、意識されないが情動が処理されていることはよく知られており (e.g., Ledoux, 1996)、それをここでは無意識的情動システムと表した。

すでに述べたように、記憶はその機能と性質によっていくつかの種類に分類される【図1】。いわゆる体験の記憶はエピソード記憶と呼ばれ、特に自分自身にかかわる記憶は自伝的記憶と呼ばれている。一方、知識に関する記憶は意味記憶と呼ばれており、その特徴や支える神経基盤も異なっていることが知られている (e.g., Baddeley, 2001; Tulving, 2002)。これらの記憶はすべて、思い出した際には何らかの意識を伴っているが、エピソード記憶（自伝的記憶）については、体験を確かに思い出しているという感覚（自己内省的意識：auto-noetic consciousness）、また意味記憶については知っているという感覚（既知意識：noetic consciousness）を得る (e.g., Tulving, 1985, 2005)。どちらも記憶を思い出していることには違いないが、その意識経験はかなり異なっていることが知られている。たとえば、電車の車内で非常になじみのある人の顔を見かけたとする。その人物を知っているという感覚は非常に強い。しかしいつどこで出会った人物であるかはまったくわからないということがある。この場合、知っているという感覚を伴う意識はあるが、体験を伴っているという感覚はないことになる。意味記憶は思い出しているがエピソード記憶は思い出していないわけである。また、主に海馬とその周辺領域の損傷によって生じる健忘症 (amnesia) 患者では、一般的知識は保たれているが自分の体験を思い出せないという、エピソード記憶の障害が選択的に生じることが知られている。これらの知見は、エピソード記憶と意味記憶がもつ特徴およびその神経基盤が異なっていることを示すものである (e.g., Tulving, 2002)。

さて、近年、過去の体験を思い出すというエピソード記憶について、その最も重要な特徴は過去を再体験するかのごとくありありと思い出すことにあると考えられている (Tulving, 2001)。そしてこのような状態はメンタルタイムトラベル (mental time travel; Tulving, 2002) という言葉で特徴づけられているが、ノスタルジアを感じる際には人生の重要な出来事が想起されることなどから、このような過去の再体験感覚は、すでに述べてきた個人的ノスタルジアと密接な関係を持っていると考えられる。さらに、自分の体験を再体験するかのごとく思い出すメンタルタイムトラベルを支えるエピソード記憶は、人間が持っている重要な進化の産物であるという主張がなされている (e.g., Suddendorf, Thomas, Donna, Corballis, & Michael, 2009; Tulving, 2005)、このエピソード記憶がヒト特殊という説については現在論争のさなかであり明確な答が出ているわけではないが (e.g., Roberts and Feeney, 2009; Suddendorf and Busby, 2003)、ただノスタルジアがきわめて人間的な感情であることを考えると、ノスタルジアがどのようにして生じるかを解明することが、ノスタルジアそのものを明らかにするだけでなく、人間が独自に持っている記憶や認知機能を解明する大きな手がかりになることを示唆していると考えられる。

もう一つ、最近明らかとなってきたエピソード記憶の機能がある。一般に記憶は過去のことがらを思い出すものとして捉えられてきた。心理学の分野においても、エピソード記憶は過去の体験の想起として、現在から過去を想起する側面について考えられてきた。しかし、近年、過去を想起する心のはたらしを支えているエピソード記憶は、未来の想像やプランニングに深く関わっていることが明らかとなってきた (e.g., Addis, Musicaro, Pan, & Schacter, 2010; Atance and O' Neill, 2001; Berntsen and Bohn, 2010; Schacter, Addis, & Buckner, 2007, 2008; Szpunar, 2010)。つまり、過去を鮮明に思い出す能力と将来を鮮明に想像する能力とは、共通の心理的基盤を持つのではないかという考え方である。

たとえば、健忘症患者 K.C. は事故による脳損傷のために事故より以前の体験に関するエピソード記憶を思い出すことができなくなったが、それと同時に、将来を想像することが困難であることが見いだされている (Tulving, 1985)。つまり過去を想起することと将来を想像することとは密接な関係があると考えられるのである。では将来を想像する心的行為にはどのような過程が含まれるのであろうか。一般に、将来を詳細に想像するためには、過去の記憶の断片をつなぎ合わせる必要があると考えられている。ただ、その結合は単に異なった断片をつなぎ合わせるだけではない。Hassabis et al. (2007) は、両側の海馬損傷によって健忘症となった患者 (エピソード記憶の障害がある) を対象に、日常的出来事 (たとえば「天気の良い夏の日に浜辺で寝そべっていることを想像してください」) を想像することを求めた。その結果、健常者に比べて健忘症患者は想起内容の量や詳細さが少なかつただけでなく、特に、空間的情報の

一貫性が欠けていた。このことは、単に複数の情報をつなぎ合わせることはできたとしても、それらが空間的なつながりをもったりストーリー性のある出来事を想像することが困難であることを示している。さらに、他の要因、たとえば、自殺企図に至るような抑うつ傾向が高いと過去も未来も詳細に思い浮かべることができないこと (Williams, Ellis, Tyers, Healy, Rose, & MacLeod., 1996)、統合失調症患者は一貫した詳細な想起が過去も未来も困難であること (D'Argembeau, Raffard, & Van der Linden, 2008)、過去の想起と未来の想像の能力は3歳から5歳の間に発達すること (Atance & O'Neill, 2005; Busby & Suddendorf, 2005)、若年者より高齢者の方が思い浮かべた内容の具体性が欠けていること (Addis, Wong, & Schacter, 2008) などが明らかとなっている。これらの知見は、過去を再体験するかのごとく想起する能力と未来を詳細に想像する能力が共通の基盤に基づいていることを示すものである¹。さらに、人間が行う判断には、瞬時に判断する場合と慎重に判断する場合があるが、過去と未来を詳細に想像する能力は、後者の判断場面を支える基礎的能力として、進化してきたのではないかと考えられている (Boyer, 2008)。

このように、人間が自分の過去を詳細に想起し、未来を詳細に想像する能力の基礎にエピソード記憶があることが明らかとなってきている。このエピソード記憶がヒトが現在の環境に適応するために進化してきた記憶システムであるとするれば、過去を再体験するかのごとく想起するメンタルタイムトラベルと密接な関係のあるノスタルジアという感情もまたきわめて人間的な感情であると考えられよう。その科学的証拠についてはさらなる今後の研究を待たなければならないが、ノスタルジアの生起メカニズムとその機能の解明は、単なる個別事象の解明ではなく、人間のこころを解明する中心的課題であることには疑いがない。

6 最後に

本論文では、ノスタルジアの心理学的研究について述べながら、ノスタルジア経験がどのような特徴を持っているか、どのような機能を持っているかについて述べてきた。そして、ややネガティブな気分の時に生じやすいこと、他者との関わりのある重要な出来事の想起と関連すること、ノスタルジアを感じることでネガティブな気分がポジティブな気分へと変化すること、ノスタルジアは日常しばしば経験されること、また、他者との社会的つながりをより感じやすいことなどが明らかとなった。さらに、そして、ノスタルジアを生じさせる基盤にある心的メカニズム、具体的にはエピソード記憶との関連について考えてきた。

筆者はノスタルジアという複雑な感情の生起メカニズムを解明することは、

¹ 海馬とその周辺領域、および前頭前野を中心とした脳領域が、共通の神経基盤として考えられているが、本論文では割愛する。神経基盤に関する議論は D'Argembeau et al.(2010)、Schacter and Addis.(2007) を参照。

人間のこころの中でもヒトという種のみが持っている高次な機能を解明することに役立つと考えている。ノスタルジアは過去への郷愁を伴うため、過去に向かう視点が強調されるかもしれない。しかし、ノスタルジアを感じることで、よりポジティブな気分を生起させることや、その基盤にあるエピソード記憶が未来を想像する心のはたらきに関連していることなどから、ノスタルジアは人間が将来をプランニングしていくという未来に向かう機能について重要な役割を果たしていることが考えられる。

本論文では、歴史的ノスタルジアについてはほとんど触れてこなかった。その大きな理由は、歴史的ノスタルジアに関する実証的な心理学的研究がほとんどないためである。個人的ノスタルジアと歴史的ノスタルジアによって引き起こされる感情が同じか違うかについてもまだわかってはいない。ただ、個人的ノスタルジア感情が、こころの健康を支えるという機能があることが明らかになってきたことを考えると、歴史的ノスタルジアも人間のこころを支える機能があるであろうことは想像に難くない。

参考文献

- Addis, D. R., Musicaro, R., Pan, L., & Schacter, D. L. (2010). Episodic simulation of past and future events in older adults: Evidence from an experimental recombination task. *Psychology and aging, 25*, 369-376.
- Addis, D. R., Wong, A. T., & Schacter, D. L. (2008). Age-related changes in the episodic simulation of future events. *Psychological Science, 19*, 33-41.
- Atance, C. M., & O'Neill, D. K. (2001). Episodic future thinking. *Trends in Cognitive Sciences, 5*, 533-539.
- Atance, C. M., & O'Neill, D. K. (2005). The emergence of episodic future thinking in humans. *Learning and Motivation, 36*, 126-144.
- Baddeley, A. (2001). The concept of episodic memory. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London Series B-Biological Sciences, 356*, 1345-1350.
- Berntsen, D., & Bohn, A. (2010). Remembering and forecasting: The relation between autobiographical memory and episodic future thinking. *Memory and Cognition, 38*, 265-278.
- Bonanno, G. A. (2005). Resilience in the face of potential trauma. *Current Directions In Psychological Science, 14*, 135-138.
- Boyer, P. (2008). Evolutionary economics of mental time travel? *Trends in Cognitive Sciences, 12*, 219-224.
- Brown, S., Kozinets, R. V., & Sherry, J. (2003). Teaching old brands new tricks: Retro branding and the revival of brand meaning. *Journal of Marketing, 67*, 19-33.
- Buñuel, L. (2002). *An unspeakable betrayal: selected writings of Luis Buñuel*. California: University of California Press.
- Busby, J., & Suddendorf, T. (2005). Recalling yesterday and predicting tomorrow. *Cognitive Development, 20*, 362-372.
- D'Argembeau, A., Raffard, S., & Van der Linden, M. (2008). Remembering the past and imagining the future in schizophrenia. *Journal of abnormal psychology, 117*, 247-251.
- D'Argembeau, A., Stawarczyk, D., Majerus, S., Collette, F., Van der Linden, M., Feyers, D., Maquet, P., Salmon, E. (2010). The neural basis of personal goal processing when envisioning future events. *Journal of Cognitive Neuroscience, 22*, 1701-1713.

- Davis, F. (1979). *Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia*. New York: Free Press.
- 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子 (訳) (1990) ノスタルジアの社会学 世界思想社.
- Gabriel, Y. (1993). Organizational nostalgia: Reflections on "The Golden Age." In S. Fineman (Ed.), *Emotion in organizations*. London: Sage, Pp.118-141.
- Garnezy, N. (1991). Resiliency and vulnerability to adverse developmental outcomes associated with poverty. *American Behavioral Scientist*, 34, 416-430.
- Hassabis, D., Kumaran, D., Vann, S. D., & Maguire, E. A. (2007). Patients with hippocampal amnesia cannot imagine new experiences. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 104, 1726-1731.
- Hofer, J. (1934). Medical dissertation on nostalgia (C. K. Anspach, Trans.). *Bulletin of the History of Medicine*, 2, 376-391 (original work published in 1688).
- 堀内圭子 (2007) 消費者のノスタルジア—研究の動向と今後の課題—. 成城文藝, 201, 179-198.
- Kusumi, T., Matsuda, K., & Sugimori, E. (2010). The effects of aging on nostalgia in consumers' advertisement processing. *Japanese Psychological Research*, 52, 150-162.
- LeDoux. (1996) *The emotional brain: The mysterious underpinnings of emotional life*. New York: Simon & Schuster. 松本元・川村光毅ほか訳エモーションヨナル・ブレイン：情動の脳科学 東京大学出版会
- Roberts, W. A., & Feeney, M. C. (2009). The comparative study of mental time travel. *Trends in Cognitive Sciences*, 13, 271-277.
- Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2008). A blast from the past: The terror management function of nostalgia. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 132-140.
- Russell, D. W. (1996). UCLA Loneliness Scale (Version 3): reliability, validity, and factor structure. *J Pers Assess*, 66, 20-40.
- Schacter, D. L., Addis, D. R., & Buckner, R. L. (2007). Remembering the past to imagine the future: the prospective brain. *Nature Reviews Neuroscience*, 8, 657-661.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C. (2008). Nostalgia: Past, Present, and Future. *Current Directions in Psychological Science*, 17, 304-307.
- Suddendorf, T., Addis, D. R., & Corballis, M. C. (2009). Mental time travel and the shaping of the human mind. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London Series B-Biological Sciences*, 364, 1317-1324.
- Suddendorf, T., & Busby, J. (2003). Mental time travel in animals? *Trends in Cognitive Sciences*, 7, 391-396.
- Szpunar, K. K. (2010). Episodic Future Thought: An Emerging Concept. *Perspectives on Psychological Science*, 5, 142-162.
- Tulving, E. (1985). Memory and consciousness. *Canadian Journal of Psychology*, 26, 1-12.
- Tulving, E. (2001). Episodic memory and common sense: how far apart? *Philosophical Transactions of the Royal Society of London Series B-Biological Sciences*, 356, 1505-1515.
- Tulving, E. (2002). Episodic memory: From mind to brain. *Annual Review of Psychology*, 53, 1-25.
- Tulving, E. (2005). Episodic memory and autoeogenesis: Uniquely human? In H.S.Terrace and J.Metcalf (Eds.) *The missing link in cognition: Origins of self-reflective consciousness*. Oxford: Oxford University Press. Pp. 3-56.
- Wagnild, G. M., & Young, H. M. (1993). Development and psychometric evaluation of the Resilience Scale. *Journal of Nursing Measurement*, 1, 165-178.
- Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: content, triggers, functions. *Journal of personality and social psychology*, 91(5), 975-993.
- Wildschut, T., Sedikides, C., & Routledge, C. (2008). Nostalgia: From cowbells to the meaning of life. *The Psychologist*, 21, 20-23.

Williams, J. M., Ellis, N. C., Tyers, C., Healy, H., Rose, G., & MacLeod, A. K. (1996). The specificity of autobiographical memory and imageability of the future. *Memory & Cognition*, 24, 116-125.

Zimet, G., Dahlem, N., Zimet, S., & Farley, G. (1988). The Multidimensional Scale of Perceived Social Support. *Journal of Personality Assessment*, 52, 30-41.